

詠歌が繋ぐ地域のアイデンティティとネットワーク

—和歌山歌学協会と『わかのうら浪』をめぐる—

松澤俊二

はじめに

『和歌山県史』は、一八九〇年代初頭の県内における雑誌の出版状況を次のように記す。

明治二〇年代の和歌山県には、歌学を中心とした数種の雑誌が登場している。まず、明治二三年九月創刊の歌学雑誌『わかのうら浪』（発行人・野田大二郎）、二四年一月創刊の『鶴鳴新誌』（編集兼発行者・水島秀穂）、二六年創刊の『紀乃海』（編集人・多紀仁之助）などが確認できる。いずれも月刊で、和歌山市内から発行されたものだ。このうち『わかのうら浪』は和歌山歌学協会に係わりをもつもののように、その大会の様などを伝えるが、旧派和歌の色彩が濃厚で新しい文芸誌とは言い難い。

和歌山県史編さん委員会編『和歌山県史 近現代一』（一九九一、和歌山県）二七二頁

この記述からは、当時の県内で歌学雑誌刊行が相継いでいたこと、その嚆矢が『わかのうら浪』で和歌山歌学協会(以下、「協会」)が関わったことが確認できる。だが『わかのうら浪』は「旧派和歌の色彩が濃厚」で「新しい文芸誌」と言い難い」と評されるのみで、協会にもこれ以上の言及はない。⁽¹⁾

この雑誌と協会について須山高明に注目すべき二つの指摘がある。一点目に、雑誌は紀州藩の国学者加納諸平の活字化されていない歌論を載せており、「諸平研究の上でも非常に貴重」ということ。⁽²⁾二点目に、協会は諸平に師事した紀俊尚、前田水穂、矢田部弘典ら「柿園派が中心」となって結成されたということである。特に二点目の指摘は本稿にとっても重要だが、しかし須山論文も和歌山の書肆野田大二郎の事跡を追うことが主題であるため、雑誌や協会にこれ以上踏み込んでいない。

『わかのうら浪』を「旧派」の仕事と見るのは、「自己」表現を主眼とする「新派和歌」、のちの「近代短歌」を是とする見方をとるからだろう。また、一方の須山も江戸後期に生きた諸平との関連から協会や雑誌を評価していた。これら先学の仕事に対して、本稿は協会と『わかのうら浪』を、それらが生まれた時代と社会のなかに置き直したいと考える。そのうえで、例えば協会結成の理由や集まった人々の姿、彼らが結んだネットワークのあり方、活動実態等を明らかにしたい。

以上の考察は、その人数と質において「紀州派を凌駕してゐるものは絶無」、如何なる地方集団も断じて紀州派には及ばない」とまで高く評価された近世期の和歌山歌壇とその活動が、明治期以降にどう継承されたかを明らかにする試みとなる。⁽³⁾ひいては、その遅れが指摘される近代国学研究の欠を多少なりとも補うものとなるだろう。⁽⁴⁾



『わかのおうら浪』（第四・五集）表紙（稿者蔵）

一、「わかのおうら浪」について

先に本稿の基礎資料となる『わかのおうら浪』について確認する。和本で大きさは中本サイズ（19 cm×13 cm）、平均して二〇丁ほどの小冊子である。毎号の表紙には海上を飛ぶ二羽の鶴と浜辺に群生する芦が描かれた。山部赤人の『万葉集』収載歌「若の浦に潮満ち来れば濁をなみ芦辺をさして鶴鳴き渡る」をそのままデザイン化したものだ。編集は協会の幹事を務めた田納調（美都具）による。発行は和歌山の書肆野田大二郎が請け負った。一八九〇年九

月から毎月一回刊行されたが、現在確認できるのは一八九一年一二月に出された一五集までである。ただし一五集に休刊や廃刊を窺わせる記述はなく、それ以降も継続した可能性がある。非売品で、会員に配るために必要な部数が刷られたのだろう。現在和歌山県立図書館が所蔵している。

※以下、『わかのおうら浪』からの引用には適宜句読点を付し、旧漢字を新字とした。また清音で表記された単語には濁点を付し通行の表記に改めた。

2、協会結成の経緯

和歌山歌学協会は一八九〇（明治二三）年七月二十六日、和歌山城にほど近い岡東館で開会式を行った。

会の目的として「和歌山歌学協会々則」（以下、「会則」）に、〈歌学ヲ奨励シテ国史国文ヲ研究〉するとある。⁶では彼らが〈歌学〉を奨励し〈国史国文〉を学ぼうとした動機は何か。協会の副会長に就任した近藤幸止は『わかのうら浪』創刊号に次のように記している。

今の世、万の国と交際の道ひらけ、文化日に月に進むにしたがひ、種々の学芸技術ををさめむこと欠くべからざる時なれば、かの横文字を学び外国の言葉をも習ふはさることながら、そが為に尊き 皇国の道を打わすれ 皇国の人としていにしへのてぶり、古ふみをもしらず、歌よみ得ることだにおぼつかなき人のさはなるは、いともくく口をしきことゞもにて、もとをすて、末にはしるのそしりを免がれざるべし。∴（中略）∴皇国の御稜威を外 国に輝さんと思ふ志の友こたび打かたらひ、若山に於て歌学協会をたて、古ぶりに心をみがき、言霊の幸はふ国の神ながらの風調を維持して、いさゝか風教をたすけむとす。

「和歌山歌学協会の設立を祝する詞」（『わかのうら浪』第一集、一八九〇・九）

ここでは、明治期日本における〈万の国〉との交際、種々の学芸技術の導入が〈欠くべからざる〉ことと捉えられている。ゆえに〈かの横文字を学び外国の言葉をも習ふ〉ことも是認されている。ただし近藤が問題視するのは、それらを学ぶために〈皇国の人としてのいにしへのてぶり、古ふみ〉などが閑却視されている点である。彼は〈歌よみ得ることだにおぼつかなき人〉が多いことを〈口をしきこと〉という。こうした事態を憂慮して、〈皇国の御稜

威を外国に輝さんと思ふ志の友」が集まり協会が結成されたという。

協会の講義師荒巻利蔭もほぼ同様の理由を同じ創刊号に記す。「歌学協会のはつむしろに侍りて」では、「今やことさへぐ外国ぶりさへまねびおこなはるめるに、かしこきや神ながらなるわが此道」の衰退が、「こゝろある君たち」のなかで憂慮されていたという。そしてその人々が思い起こして「歌学協会てふことを物しつる」と、結成の理由を明かす。

協会の結成された一八九〇年前後には、日本の歴史や文学を中心とする出版物の刊行や教育機関の開校が相次いでいた。⁽⁷⁾ 鹿鳴館時代後の反動ともとれるこの風潮のなかに協会も結成された。

これに絡めていえば、維新以降の和歌山では洋学を修めた人々、特に福沢諭吉の慶応義塾の学統に連なる官吏や教師の登用、教育機関の拡充があった。⁽⁸⁾ 近藤や荒巻が記した「外国」の知識や文物の流入は彼らの目前の問題でもあった。これをやむをえないことと肯いながらも、なお違和感を抱く人々の「皇国の御稜威を外国に輝さんと思ふ志」から、協会は結成されたのである。

ところで、国学的な言辞ではまず異国について否定的に語り、それから「自己(日本)」に言及することを常とする。⁽⁹⁾ 近藤らの文章にも、外国の文物の流入に対して、「皇国の人」としてのナショナルな感情を振起させようとする定型的な語り口が見られる。しかし、協会が対外的な意識からだけで結成されたと考えるのも早計である。定型的な語りの後に続く部分に注目すると、彼らの生きる地域固有の来歴を語ることで詠歌を奨励し、歌学びを合理化している。

かしこくも 聖武天皇和歌の浦に行幸し給ひし時明光浦と名づけられ、山の辺の赤人御共仕奉りしことは人々の知る所なり。夫より代々の 天皇も行幸まし／＼て、古きことのあとも多く伝はり、古史歌集などにも載せたる

いちじるき名所も少からねば、歌よむたよりもあまたあるが中にも、あしべをさして鶴なきわたるとよまれしかの聖の歌は、文見ぬわらはもしらざるはなし。

近藤幸止「和歌山歌学協会の設立を祝する詞」（前掲）

ここで近藤は、聖武天皇の和歌浦への行幸以来、連綿と続いてきた地域と和歌との関わりを回顧する。まず、行幸に付き随ったへ山の辺（まぎ）の赤人（あかひと）のこと、彼の「あしべをさして鶴なきわたる」の歌は「文見ぬわらは」にまで知られているとその有名性を強調している。また和歌山には「古史歌集」などで紹介された「いちじるき名所」も多く、歌を詠むためのよりどころが豊富にあると語る。一方の荒巻の場合はどうか。

花になく鶯水にすむ蛙の声をとは、貫之の君こそかかれたりけれ。そよその君の名におへるこの紀の国はや、言のはのいやしみ、に、その花の朝日に匂はむ国と桜根の大人も根ざししめたりけん。そをはじめとして、世々に名ある大人達も志が花の咲出ることおほかるは、猶此国にぞ有けらし。

荒巻利蔭「歌学協会のはつむしろに侍りて」（前掲）

荒巻は『古今和歌集』の序を引いて説き起こし、その編者貫之が紀姓で紀州と縁があるという。さらに「桜根の大人」は本居宣長の有名な山桜の歌の一部を引いて、彼が紀州藩に仕えた史実に触れる。さらに宣長に続く国学者たちも詠歌述作に励んだ、その地域こそ「紀の国」だとい（10）う。

こうして近藤と荒巻は、聖武天皇の行幸、山部赤人とその歌、紀貫之、歌枕の多さ、宣長と後続の国学者たちの存在を列挙して、地域と和歌が特別な由縁で結ばれてきたことを立証していく。

以上見てきたように、人々が協会結成に踏み出したのは、洋化の風潮のなかで〈皇国〉人としての危機意識を振起せられたためであった。それに加えて、会員たちには〈紀の国〉と和歌との特権的な結びつきが説かれた。その語りは、彼らに〈紀の国〉の人として詠歌すべしという具体的な行動指針を示し、今後一層の奮起を促すものであったろう。

会員たちが地域の和歌伝統を自らのことと受け止めていた証を見よう。一八九〇年七月の協会開会式では、その壁上に〈柿本人麿山辺赤人対座の画像〉が掲げられた。歌聖人麿と対等に居並ぶのは、かつてその歌で和歌浦を賛美した赤人である。また同じ壁上には紀州に国学をもたらした〈本居宣長自賛の画像〉も掛けられた。^① 会員たちは地域の和歌伝統が具現化されたこれらの像を、その出発に際して掲げた。このことは、彼らが〈紀の国〉の人として詠歌するというアイデンティティを改めて選び取った証と言えよう。

3、会員の姿

本節では会員たちについて検討したい。協会結成に賛同したのはどのような人々で、どうして協会に集まったのか、また彼らがいかなるネットワークを有していたかなどがテーマとなる。

検討に先だって誰が会員だったかを確定する必要がある。この作業には『わかのうら浪』収載の三種の資料を用いた。その資料とは、(A)創刊号掲載の会員名簿、(B)毎月掲載された新入会員情報、(C)こちらも毎月掲載の会費納入者氏名である。これらを整理・集計すると一四四名(内、名誉会員は一〇名)となる。さしあたって、この人々を協会会員と認定しておく。^②

では、彼らはどのような人々だったのか。一人ずつ見ていく紙幅は無いため、特に協会を代表すると思われる役

職者について検討する。【表1】は役職者三二名を一覧化したものである。

まず、会長には男爵紀俊尚が就任した。俊尚の家は旧紀伊国造家で、日前宮(紀伊国一宮)の祭祀を代々継ぐ名族である⁽¹³⁾。

副会長には近藤幸止が就いた。伊勢亀山藩出身で明治政府の官僚である。政府官僚が和歌山にいた理由は、彼が県知事を補佐して行政に関わる大書記官として赴任していたからである。幸止の家は勤王の家柄で彼自身も国学に熱心だった⁽¹⁴⁾。あるいは幸止の和歌山赴任が協会結成の直接的契機となったとも推測できる。しかし彼は発会直後の一月に島根県に転出し副会長職を幹事の岩崎奇一に譲った⁽¹⁵⁾。

次に正副歌学師には前田水穂と古屋蒼賢が名を連ねた。「会則」によれば⁽¹⁶⁾、歌学師は「会員ノ詠歌ヲ改竄批評シ古言ノ弁明ヲ為ス等統テ学事ヲ管掌」することが任務である。どちらもかつて紀州藩国学所に出仕していた。

〈専ラ史書ヲ講義〉する講義師は倉田績と荒巻利蔭である。倉田は儒者だが国学にも通じており藩政時代から著名だった。荒巻は本居内遠の次男であり、本居国学の学統を継ぐ一人である⁽¹⁷⁾。

上で見た人々では紀、前田、古屋らが加納諸平に師事した柿園派だった。冒頭で確認した須山高明の指摘はその意味で正しい。ただし、近藤や荒巻ら鈴屋派の学統に連なる人々も要職にいたることから、柿園派以外の人々の知見も協会に取り入れようとしたようである。

さて、協会の役職にはさらに幹事と書記が加わる。幹事の職は「本会ノ事務ヲ処理」することで、書記は「本会ノ録事ヲ掌リ雑誌ヲ編輯シ経費ノ出納」をすることが任である。そして、ここまでの段階で協会の人的構成の特徴を三点指摘できる。

一点目に、協会には神職が多数関わっていた。紀俊尚の他にも講義師の倉田(和歌山水門神社)、幹事の奥五十鈴(伊太祁曾神社)、猪飼重隆(和歌浦東照宮)、矢田部弘典(日前宮)、松島調(木本八幡宮)らがいた。

【表1】協会役職者一覧

| 氏名 | 役職 | 居住地 | 履歴及び参考資料 |
|-------|------|------|---|
| 紀俊尚 | 会長 | 名草郡 | 日前宮祭主。1896年、62歳で死去。【和】【紀】 |
| 近藤幸止 | 副会長 | 和歌山市 | 和歌山県大書記官。1909年に67歳で死去。【和】 |
| 岩崎奇一 | 副会長 | 和歌山市 | 和歌山県取税長。幹事から2代目副会長に就任。【官】 |
| 吉永成徳 | 副会長 | 記載無し | 和歌山地方裁判所長。名誉会員から3代目副会長に就任。【官】 |
| 前田水徳 | 歌学者 | 和歌山市 | 紀伊藩国学所に出仕。加納諾平に師事。1898年に76歳で死去。【和】【紀】【木】 |
| 古屋皆賢 | 副歌学者 | 和歌山市 | 紀伊藩国学所に出仕。加納諾平に師事。日高郡八幡社司官。1906年に89歳で死去。【和】【紀】【木】 |
| 倉田績 | 講義師 | 和歌山市 | 竈山神社宮司などを歴任。1919年に93歳で死去。【和】【紀】 |
| 荒巻利蔭 | 講義師 | 和歌山市 | 本居内達次男、豊頼の実弟、高等女学校、徳義中学校などでも勤務。1913年に78歳で死去。【和】【紀】【木】 |
| 瀧脇英潔 | 幹事 | 和歌山市 | 和歌山県庶務課に勤務。【官】 |
| 猪飼重隆 | 〃 | 和歌山市 | 和歌浦東照宮社司。【花】 |
| 草野萌 | 〃 | 和歌山市 | 享誠社社員。和歌山市内に簿記数学専修学校を開設。【纂】 |
| 武津周政 | 〃 | 和歌山市 | 徳義社総代、旧藩士。本居内達、加納諾平らに師事。1900年に75歳で死去。【和】【紀】【木】 |
| 和田正秋 | 〃 | 和歌山市 | 不詳。協会では書記も兼務。 |
| 岡本善徳 | 〃 | 和歌山市 | 不詳 |
| 矢田部弘典 | 〃 | 海部郡 | 矢ノ宮神社社掌、昭和18年に92歳で死去。国学者矢田部彦光の子。【花】【木】 |
| 野田良貞 | 〃 | 有田郡 | 県会議員、藤並村村長などを歴任。【名】 |
| 山田真幸 | 〃 | 和歌山市 | 和歌山県庶務課に勤務。協会では書記も兼務。【官】 |
| 松廣繁徳 | 〃 | 和歌山市 | 不詳 |
| 山田正 | 〃 | 東牟婁郡 | 「熊野新報」主筆。国学者山田常典の子。【帝】【木】 |
| 大井惠舜 | 〃 | 和歌山市 | 松生院中僧正。【花】【帝】 |
| 井村牆柳 | 〃 | 和歌山市 | 不詳 |
| 辻井日教 | 〃 | 和歌山市 | 報恩寺僧侶。俳句、茶道、陶芸などにも通じる。1906年に78歳で死去。【紀】 |
| 古田兼彌 | 〃 | 和歌山市 | 和歌山県属。【官】 |
| 松島調 | 〃 | 名草郡 | 木本八幡宮社司。【花】 |
| 奥五十鈴 | 〃 | 名草郡 | 伊太祁曾神社宮司。【帝】 |
| 森部好謙 | 〃 | 海部郡 | 徳義社社員。旧藩士。「和歌山新報」発刊に協力。【市】 |
| 眞海良諦 | 〃 | 那賀郡 | 不詳 |
| 貴志熙正 | 〃 | 和歌山市 | 和歌山県取税属4等。【官】 |
| 岩橋彦五郎 | 書記 | 和歌山市 | 稗叢と号す。詩書や教義の他、皇漢の学を倉田績に学ぶ。1915年に58歳で死去。【紀】 |
| 岩橋孝彦 | 〃 | 記載無し | 不詳 |
| 野田正嘉 | 〃 | 和歌山市 | 不詳 |
| 田納調 | 〃 | 和歌山市 | 「わかのうら浪」奥付に編集人、士族とあり。 |

【和】・・・ 國學院大學日本文化研究所編・発行『和学者総覧』（1990）

【紀】・・・ 貴志康親編・発行『紀州郷土芸術家小伝』（1934）

【木】・・・ 木村成蔭編『木國歌人傳』（1915、木村東蔵）

【花】・・・ 木村成蔭編『木花集』（1918、木村東蔵）

【帝】・・・ 堀江宏義『帝國紳士名鑑』（1906、帝國交信社）

【名】・・・ 大橋健之助『和歌山県名譽家及商工人名録』（1894、報道館）

【市】・・・ 和歌山市史編纂委員会『和歌山市史 三卷』（1990、和歌山市）

【官】・・・ 『改正官員録 明治23年乙』（1890、博公書院）を中心に、22年版、24年版なども使用。

【纂】・・・ 土井吉十郎『明治新撰紀伊繁盛誌』（1893、大橋謙之助）

実は彼らと俊尚には協会結成以前から和歌を通した繋がりがあった。一八八八年に刊行された俊尚編『日前国県神宮歌詠』を見ると、神職らが月々の歌の集いを催していたこと、その会場は日前宮で、中心に俊尚がいたことがわかる。この詠歌する神職集団が協会の源流の一つになったことは同書の存在から疑いがないと思われる。

二点目に、現職官吏たちが協会に参加していたことも特徴的だ。副会長の近藤が県の大書記官という重職にあつたことはすでに記した。そして彼以外では岩崎奇一(収税長)、貴志熙正(収税属)、瀧脇英潔(庶務課)、古田兼彌(和歌山県属)、山田眞幸(庶務課)らが現職官吏だった。このことは当時の官員録から明らかである。⁽¹⁸⁾

ここに付け加えておきたいのは、協会と和歌山県・市政界との関わりである。協会は名誉会員に石井忠亮、長屋喜彌太、吉永成徳らを迎えた。それぞれ当時の県知事、市長、地方裁判所長である。先に大書記官、収税長がいたことを指摘したが、それに加えて協会は県・市の政治、行政、司法のトップとも関係していたのである。では、彼らは文字通り「名誉」職として「箔付け」のために会に加わったのだろうか。必ずしもそうとはいえない。特に近藤、岩崎、吉永らは『わかのうら浪』に和歌や文章をしばしば寄稿した。名実ともに会の活動をリードしていたのである。⁽¹⁸⁾

三点目に、旧紀州藩士たちの協会への集团的な参加を指摘したい。前田や古屋、『わかのうら浪』編集人の田納調も士族だった。幹部では他に草野萌、武津周政、森部好謙らが士族であったことは、彼らが旧藩士の経済的な救済と師弟教育のために設立された徳義社社員だったことからわかる。⁽¹⁹⁾ 一般会員にも徳義社社員⁽¹⁹⁾ 旧藩士と見なしうる人物は多い。

では、なぜ旧藩士たちは協会に加わったのか。その理由は近世期に淵源していた。一七八七年に本居宣長が『秘本玉くしげ』と『玉匣』を紀伊侯に献上して以来、⁽²⁰⁾ 国学は紀州藩の施政の一環⁽²⁰⁾ となった。さらに宣長の養子大平が和歌山移住後に獲得した門弟三七七名のうちへ大半は紀州藩士であつた⁽²¹⁾。やがて設立された藩の国学所では加

納諸平が、その弟子の前田や古屋らが藩士達に教授した。明治になり、前田らが協会を発足させた際に、かつての教子たちが再集したことは十分想像しうる。

以上、記したように協会幹部には主に神職、現職官吏、旧藩士族の三集団が存在した⁽²²⁾。特に幹事は新入会者の窓口となっていたから⁽²³⁾、これらの職業集団に近い人々が一般会員として多く加入したものと思われる⁽²³⁾。では、この異なる集団を結びつけて協会結成へと促した原動力は何だったのか。もちろんそれぞれが詠歌や国学の学びという文化的営みだった⁽²⁵⁾。

この証左として前田水穂が率いていた月廂社中(月廂は前田の号)を挙げたい。同社中の歌集『去年のしをり』(一八八九、野田大二郎)は協会結成前年の刊行になるが、ここにはすでに先の三グループの有力者(例えば紀俊尚、瀧脇英潔、草野萌ら)が出詠していた。つまり、この社中では平時の職業集団の敷居はすでに越えられていた。

協会は、この月廂社中や紀俊尚を中心に詠歌する神職集団の大同団結の結果、誕生した⁽²⁶⁾。紀州藩以来継承されてきた文化的な営みが、明治の半ばにも改めて人々の紐帯として機能したのである。

4、会員の広がり組織づくりの狙い

本節では、前出(A)の名簿から会員の居住地を明らかにしたうえで、協会が試みようとした組織づくりの特質について検討したい。

【表2】に会員たちの居住地を一覧化して示した。ここからまずは和歌山市が一般会員一三四名のうち六一名を擁し、他地域を大きく引き離していたことがわかる。

次に会員が多いのは、驚くべきことに陸中胆澤郡である。現在の岩手県南部にいた会員は一七名を数える。しか

し、なぜ東北の胆澤に会員が集中していたのか。柿園派に近い有力な指導者がいた可能性なども考えられるが、現時点で理由は不明である。今後さらに調査を進めたい。

第三、第四位は紀州の名草郡(二名)、海部郡(九名)である。両郡は当時の和歌山市に隣接した地域で、現在は市域の一部を構成する。紀俊尚の仕えた日前宮は当時名草郡にあった。

以下には東牟婁、伊都など県内郡部が続く。また東京や播磨、土佐などにも少数ながら会員がいた。以上のような状況をふまえたうえで、その特徴を三点指摘しておく。

一点目は、ごく当然の指摘になるが、協会は和歌山市民を中心としていたという点である。数の問題だけでなく、【表1】を見ても役職者には市民が多かった。つまり協会の実務の多くを彼らが担っていたのである。

市に会員が集中した理由としては、これも近世からの所縁がたどりうる。本居大平の紀州における門人で、三三七名のうち城下町の門人は二三五名に上つていゝたという⁽²⁷⁾。ならば市内への会員集中は、かつての城下町の門人たちがその国学を脈々と子弟に伝えた結果とも考え得る。

第二に、協会は「和歌山」という地域名を名乗りながら参加者を県内者に限ろうとしなかった。規則に「有志ノ人ハ何地ヲ問ハズ何人ヲ論ゼズ」入会可能との文言がある⁽²⁸⁾。実際、陸中その他の府県に会員は存していた。では協会は、彼ら他県の会員をどう処遇したのだろうか。

意外と言ふべきか、遠隔地の人々の意見は尊重された。例えば、会の規則や方針を議論する総会議にへ出席する

【表2】会員の居住地

| | | | |
|---------|----|------------------------|-----|
| 和歌山市 | 61 | 日高郡 | 3 |
| 胆澤郡(陸中) | 17 | 西牟婁郡 | 2 |
| 名草郡 | 12 | 有田郡 | 2 |
| 海部郡 | 9 | 龍野(播磨) | 2 |
| 東牟婁郡 | 5 | その他(土佐、阿波、摂津、大隅・・・各1名) | 4 |
| 東京(武蔵国) | 5 | | |
| 伊都郡 | 4 | 記載無し | 4 |
| 那賀郡 | 4 | 合計 | 134 |

*名誉会員10名は除く。

能はざる会員」に対しては、事前に「異見あらば封書に認め幹事迄送致を乞ふ」と意思表示を呼び掛けている。⁽²⁹⁾つまり遠隔地の人々も無視されることなく、協会の運営に意見を呈することができたのである。

第三点として指摘すべきは、協会が東京在住者との関係形成に取り組んでいたことである。特に旧紀州藩主家、さらに宮中との関係形成を積極的に模索していた。

先に、前者の例を見ておく。東京の会員は五名、実にそのうち三名（鵜澤雅房、江川良純、高橋渡）が当時麻布にいた旧藩主家の家扶だった。加えて名誉会員には藩主家の家令齋藤桜門もいた。⁽³⁰⁾彼ら四人とも『わかのうら浪』一〇集から新加入している。彼らの一斉の加入は、協会が急速に旧藩主家との関係を深化させたことを示している。

では協会が旧藩主家と繋がるメリットとは何か。かつて紀州藩は国学を官学として保護・育成してきた。その藩主家のいわば「公認」を得ることにより、協会は明治における紀州国学の正統な継承者として人々にアピールすることが可能になるだろう。旧藩の名は新設の協会にとってこれ以上ないほどの権威づけになったに違いない。⁽³¹⁾

次に、協会と宮中との関わりを見よう。名誉会員の堀河康隆がここでのキーパーソンである。堀河は子爵家の出身で明治天皇の侍従だった。また彼は一八八八年に宮内省に御歌所が設置された際に参候に任じられており歌道の達人でもあった。⁽³²⁾さて、その堀河が一八八九年八月に和歌山を訪れている。当時県に襲来した台風の被害状況視察のためだが、その案内をしたのが県の収税長で後に協会幹事、二代目副会長となる岩崎奇一であった。⁽³³⁾視察時に和歌に関する話も出たのだろう、協会は堀河を名誉会員に迎えた。

天皇の侍従、御歌所参候である堀河との関係形成について想像をたくましくすれば、桂園派や堂上派を中心とする御歌所に対して、紀州に柿園派ありと宣伝する意図もあったかもしれない。また宣伝は堀河を通じて、自身歌道に熱心な天皇の耳に達する可能性もあった。一方の堀河も協会の活動を嘉納していたことは疑いなく、短冊を協会に寄付するなどの支援を行っている。⁽³⁴⁾

協会と東京との繋がりを見るうえで本居豊穎の名も逸することはできない。豊穎はもと紀州藩士で、協会の歌学師荒巻利蔭の実兄であり、本居国学の正統を継ぐ一人である。豊穎は当時神道行政の中心にいたが宮中からの信任は厚く、歌人としての声望も高かった。³⁵特に注意したいのは彼が中心になって組織した大八洲学会の活動である。彼は国学の衰退を嘆き、その内容を深めかつ広めるために雑誌を刊行して斯学の振興に努めた。組織運営や雑誌刊行の実績があり、³⁶最新の国学界の動静に通じた豊穎を協会は名誉会員に迎えた。彼の意見も聞きながら協会の開会準備は進められたのである。³⁷

さて、以上のような組織づくりからは協会のどのような思惑が看取できるだろうか。結論的にいえば、彼らは従来の紀州国学を継承するだけでなく、それを新時代に即したかたちに革新しようとしたものと思われる。

その革新とは例えば、協会の名のもとに紀州の和歌に心を寄せる人々を遠近問わずに糾合して、彼らの意見も取り入れて組織の更新を図るということである。また、月々雑誌を発行して歌学、国学の研究と情報発信の基点にすることである。³⁸さらに宮中や東京で活躍する歌人たちと繋がり、中央の歌人たちの動静や和歌に関わる最新の知見を吸収するということである。このように協会の企図するところは、紀州の歌学、国学の継承とその革新とにあつたものと思われる。

5、活動の実態

最後に、協会の活動がどのように行われていたか、その実態を見ておきたい。会は歌学の奨励と国史国文の研究を目的として、〈毎月第一土曜日ヲ以テ歌会ヲ開キ第三土曜日ヲ以テ講義会ヲ開ク〉〔会則〕第一条〕ことを取り決めていた。

『わかのうら浪』には活動の具体的な様子がわかる記述は少ない。だが、例えば第二集(二八九〇・一〇)に、同年八月の講義会と歌会の様子が記録されている。

まず講義会について、会場が和歌山市内の女子高等小学校だったこと、〈三十余人〉が集まったこと、さらに講義師倉田績が欠席したために〈前田歌師代て古事記を講じ〉たこと、さらに〈荒巻講義師伊勢物語を講じて散会〉したことがわかる。翌月からは「万葉集」が講ぜられることもこの時に決められた。

一方の歌会はどうか。これも次のような記録が残るのみである。

八月第一土曜日歌会を水門円蔵院に開く。午後一時来集する会員三十余人に及ぶ。各自探題を得て沈思詠吟す。

田納書記、兼題併に探題を被講す。

ここから、会場が水門円蔵院だったこと、参加者が〈三十余人〉で、午後一時から行われたこと、和歌は当日に出される探題とあらかじめ示されていた兼題を詠んでいたこと、書記の田納調が歌を被講したことなどがわかる。

このように通常の活動では、おそらく近傍に居住する〈三十余人〉ほどが集まって古典の学習や詠歌を楽しんでいた。また、「会則」によれば〈歌会ニ出席セザル会員〉でも本部に歌を送付しさえすれば〈其詠歌ハ批評ヲ加ヘテ返却〉された。対面教授のみならず通信添削も行つて、協会は遠隔地の会員の要望も満たそうとしたのである。

では、会員たちはどのような歌を詠んでいたのか。『わかのうら浪』各集より兼題(月次題)のみ明らかにすることができる。

一八九〇年七月、一二月：寄道祝、田上雁、浦打衣、山家月、野寒草、歳暮雪

一八九一年一月～二月：富士、霞始聳、雲雀、花漸開、瀑布、夏月涼

水鶏、萩半綻、鴉海、紅葉浅、千鳥、狩場嵐

これらの題から察するに、会員にはまず季節の景物を詠むことが求められていたようだ。加えて、和歌を折々の場で社交の具として用いうる才気も試されていた。例えば、開会式直後の歌会では「寄道祝」題が人々に提示された。この題で詠む場合は、協会結成への祝意とともに歌道の発展を祈る心を詠むことが肝要である。ただし、こうした題詠ではどうしても類想の歌が多くなり、没個性的な歌が並ぶという弊害もあった。³⁹本稿冒頭で確認した『和歌山県史』は『わかのうら浪』を「旧派和歌の色彩が濃厚」と評していた。これは誌上の諸作品の没個性的な傾向が評者に問題視されたからだろう。

しかし、なかには必ずしもそうと思われない歌も見える。例えば「田上雁」で詠まれた前田水穂の長歌である。雨霧合ひ夕月くらし露おもる葉月になれば小山田はわさ穂かりほしふもと田は中稲花さくふもと田の田屋もる賤は玉櫛筥二百まりの十日とふ日さへ近しと村肝の心を痛め妻子どもは水あふれんと去年をもしもぬびて嘆くなげくそら神の音すなり居る空もなげなるはしに稲葉ふく風にきほひて雁鳴わたる

この歌は冒頭から陰鬱な調子で始まる。詠まれた時節は「葉月」、農家の厄日である二一〇日も間近い頃である。登場人物は「ふもと田の田屋もる賤」とその「妻子」で、彼らは台風が襲来し農作物が痛めつけられることを恐れている。しかし彼らが嘆くそばから無情にも雷が鳴り出し、稲の葉を吹いて風が起る。空を見ればその風と競うように雁が鳴きながら飛んでいく、という。

この歌に漂う不安感に他の会員たちも同調しえたはずである。それというのも、この前年の一八八九年八月に襲来した大型台風のことを、人々は未だ記憶に留めていただろうからである。台風は農作物に甚大な打撃を与えただけでなく、県内で一二四七名もの人命を奪った⁴⁰。つまり、歌中で〈賤〉や〈妻子〉らが〈去年をしもしぬびて嘆く〉姿は、当時前田らが目にしえた「実景」だった。「田上雁」題で詠まれたこの歌は、題詠ながら仮想にならず、目の現実と相わたる表現を目指したものである。

このように『わかのうち浪』には和歌山という土地に生きる実感が詠まれたもの、地域に生きる人びとへの共感がうかがわれる歌も確かに存在していた。次に紹介する作品もその一例である。

その日、前田水穂、草野萌、田納調ら一四名の会員たちは和歌浦に月見に出かけた。以下、すべて『わかのうち浪』一四集(二八九一・一〇)より引く。

当日の天候について前田が「へよひのほどくもりてのちはれければ」と記しているので、当初の曇り空はやがて晴れて、ようやく月を見ることが出来たようだ。

浦なみのほの上しらみて沖とほくかをりみちくる海越の月 矢田部弘典
和歌の浦や鳴山かけてもちの夜のかげ更わたる浪の上の月 岡本善穂

一首目、沖より寄せる浪が徐々に白んで、あたり一面に磯の香りが満ちて来た。見れば、海に向こう遙かに光る月が浮かんでいる。二首目、満月の光が和歌浦から見える無数の島々を包みこむように広がる、その光はいよいよ煌々と大空に照りわたっているという。これらの歌はその日の実景、実感なのだろう。彼らが視覚だけでなく嗅覚までも研ぎ澄ませて月の出と向き合っていたことが歌の表現からうかがえる。こうした点に、「自己表現」を主張する「近代短歌」への萌芽を見ても良いだろう。だがしかし、その「自己」は彼らの生きる地域に堆積した歴史的な時間と不可分でなかったことを、やはり強調しておく必要がある。

例えば、彼らの月見は、（廣松繁穂）と詠われた清宴だった。ただしその宴はその場にいた会員とだけなされたわけではない。その場には、むろん想像的のだが、無数の古人たちも招かれていた。

和歌浦に来て、前田らは加納諸平の歌を思い出し、また本居建正らの月見を追想して、古人の心に迫った。そもそも和歌浦は山部赤人以来、無数の歌人たちがその土地をめぐって詠じた無数の詩歌の記憶が堆積するトポスである。（43）会員たちはそれらの諸作品を想起しえたのである。（44）したがって、会員たちの詠む行為は過去からの歴史的な連続性を十分意識したうえでなされた。その連続性のなかに、自らの歌をどのように連ねてゆくかも彼らが思量する問題であったと思われる。

終わりに

木村成蔭『木国歌人伝』（木村成蔭、一九一五）は明治以降の紀州歌道の盛衰を次のように伝える。

明治維新前より国事多端、且つ百般欧米文明の輸入に汲々として、我国粹を軽視せる弊風の為に、我木国歌道の如きも一時殆ど断絶の姿にて：（中略）…されど明治の太平につれて、漸く和歌の枯芦起上り、聊か角ぐみたりしも、彼の隆盛時代の遺芳たる老匠たちも年を逐ふて凋落し、今は殆ど地を払ふに至れり

おそらく協会が結成された一八九〇年頃は、維新の前後以来へ一時殆ど断絶の姿を示していた（木国歌道） Ⅱ
紀州の和歌の復興期だった。本稿で取りあげた『日前国県神宮献詠』、『去年のしをり』、そして協会結成と『わか

うら浪』刊行は、その成果だった。⁽⁴⁵⁾

しかし復興は長く続かなかつた。木村が記す一九一五年の段階では、〈和歌の枯青〉は〈殆ど地を払ふ〉状況となり、紀州の和歌は衰滅の様相を呈していた。では、なぜ復興は一転して衰退に向かったのか。いくつかの暗い兆しは『わかのうら浪』からもうかがうことができる。

まず一つは木村の言う〈老匠〉たちの〈凋落〉である。協会では一八九六年に紀俊尚が、九八年に前田水穂が死去している。『わかのうら浪』刊行中のことではないが、彼らはすでに各々の晩年に入っていた。誌上では時に会員やその家族の死が報ぜられているが、高齢化は協会全体の問題でもあった。

一方で、〈老匠〉に代わりうる新しい世代は育まれていたのか。『わかのうら浪』一二集までには二四人の新入会員がいたが、一三集以降にはまったく見られない。会勢は伸び悩んでいたと言えよう。ならば先に四節で見た諸々の革新は、少なくとも会勢の拡大には寄与すること少なかったと言わざるをえない。また、入会には幹事の紹介が必須という条件も新人の入会を難しくしたと思われる。

そして、同時代的な短歌史を俯瞰してみると、落合直文の浅香社（一八九三）が、また与謝野鉄幹の新詩社（一八九九）が、歴史の表舞台に現れようとしていた。歌を学ぶ意欲があり、しかしコネクションの無い青年達は、従来の門人組織でなく結社を選択した。しかるべき紹介者がなくても結社には入会できたからである。⁽⁴⁶⁾

協会に集まった人々の多くには、和歌山という土地で生を受けたという地縁的な共同体感情があった。あるいは宣長、諸平らをもとに慕う同門の情が色濃くあつたと思われる。そうした感情が、ときに師受をも否定して「自己」を詠み出そうという意識と相容れないことは当然だろう。⁽⁴⁷⁾そして、この鋭い「個」の意識を表現することこそ時代が新しく選んだ「近代短歌」というモードだったのである。

紀州歌壇の復興期が短く終わり、そして急速に衰退していったのも偶然ではない。

〔注〕

- (1) 執筆は梅溪昇、半田美永。他に『わかのうら浪』については半田「和歌山県近代文学史稿」(『皇學館大学紀要』一九九六・一二)、浦西和彦・半田美永『紀伊半島近代文学大事典』(二〇〇二、和泉書院)の「紀伊半島近代文学略年表」にも簡潔な記載がある。
- なお、『和歌山県史』引用部にみえる一八九一年創刊の『鶴鳴新誌』(九臯社)や、一八九三年創刊の『紀乃海』(和歌山国粹社)と、歌学協会とは直接的なつながりはないと思われる。和歌山県立図書館所蔵分を見る限りで、前者は学生を対象に和歌だけでなく漢詩や俳句などの創作、論説等を含む総合誌を志向している。一方、後者は神職を対象とした情報誌で和歌の創作活動に焦点を当てるものではない。
- (2) 須山高明「明治期和歌山における一書商の動向―坂本屋・野田大二郎の活動を中心として」(『和歌山地方史研究』二〇〇三)
- (3) 森敬三「近世歌壇における紀州派の地位」(『近世和歌の新研究』一九四三、新日本出版社)
- (4) 藤田大誠「近代国学史の構築のために」(『近代国学の研究』二〇〇七、弘文堂)は、近代国学について「近世或は幕末維新期の国学」に比べ、充分な歴史的・学問的意義を持った研究対象として認知されてきたとは言いがたく、先行業績も非常に少なかったと評する。紀州国学の場合も明治期以降の動静について論じたものは少ない。川合小梅(一八八九年没)や伊達千廣(一八七七年没)に言及した寺西貞弘「本居宣長と和歌山の人々」(和歌山市立博物館編『本居宣長と和歌山の人々』和歌山国学人物誌)二〇〇二、和歌山市教育委員会)がほぼ唯一かと思われる。
- (5) 歌の引用は小島憲之ら校注『万葉集2』(一九九五、小学館)より。
- (6) 以下、「会則」の引用は『わかのうら浪』第一集(一八九〇・九)より。
- (7) 教育機関は國學院や国史国文講習所など。出版物は三上参次・高津敏三郎『日本文学史』(金港堂)、芳賀矢一・立花銚三郎編『国文学読本』(富山房)、上田万年編『国文学』(双葉館)など。
- (8) 梅溪昇「和歌山県地域近代化の特質」、多田建次「福沢諭吉と和歌山」(ともに安藤精一編『和歌山の研究 第四卷』一九七八、清文

堂)などを参照。

- (9) 子安宜邦『本居宣長』(一九九二、岩波書店)の指摘。
- (10) 紀州国学の先行研究としては、堀内信『南紀徳川史 第一七冊』(一九三三、南紀徳川史刊行会)、和歌山県教育史編纂委員会編『和歌山県教育史 第一巻 通史編』(二〇〇七、和歌山県教育委員会)、和歌山県史編さん委員会編『和歌山県史 近世』(一九九〇、和歌山県)などを参照。
- (11) 「開会式の録事」(『わかのうら浪』一八九〇・九)
- (12) この一四四名は暫定的な会員数である。『わかのうら浪』には時に(A)、(B)、(C)どれにも記載のない人名が現れる。例えば小山多乎理、田代まつの子、三戸貞次、多屋貞一、恒川重光、内田孝友、森常敏らは人数に含めていない。
- (13) 紀家は一八〇〇年に三冬が宣長に師事して以来、代々本居国学を奉じてきた。三冬の男俊和は本居大平に、その後継である尚長は大平や内遠に師事した。
- (14) 幸止の父幸殖は亀山藩の家老職などを務めながら富樫広蔭や井上文雄らに国学を学んだ。『和学者総覧』(國學院大學日本文化研究所編・発行、一九九〇)を参照。
- (15) 「報告」(『わかのうら浪』第三集、一八九〇・一一)
- (16) 注(6)に同じ。本文中で役職の説明は全て「会則」より行う。
- (17) 以上、紀、近藤、前田、古屋、倉田、荒巻らについての記述は『和学者総覧』(注14前掲)、木村成蔭編『木國歌人傳』(一九二五、木村東蔵)、貴志康親編・発行『紀州郷土芸術家小伝』(一九三四)などを参照。
- (18) 『改正官員録 明治二三年乙』(二八九〇、博公書院)を中心に、その前後の官員録から協会関係者の氏名を拾った。
- (19) 徳義社については松田茂樹編集・発行『明治の和歌山藩士族』(一九七二)を参照。
- (20) 田林義信「紀州藩の国学」(『和歌山の研究 二巻』一九七八、清文堂)

(21) 和歌山県教育史編纂委員会編『和歌山県教育史 二巻』(二〇一〇、和歌山県教育委員会)

(22) 実際には旧藩士が「官公吏・警察官・教員等への採用によって城下に残って」、明治期にも「市政の中心的な位置」を占める状況があった。したがって三グループは必ずしも截然と分かれるわけではない。和歌山市議会編集・発行『和歌山市議会史』(一九九二)参照。

(23) 入会希望者は「幹事の紹介を以て事務所へ申出」ることが求められた。「会則」『わかのうら浪』第六・七集(一八九一・二)

(24) 文中で触れた以外に著名な協会員を挙げておく。政治家では森懋(和歌山市会議長、谷井勘藏貴族院議員)ら、教育者では恒川録之助(和歌山師範学校教師)、勝浦柄雄(和歌山師範学校校長、篤農家では中筋麟二郎、久保田甚七、新聞人には山田正(熊野新報)主筆)、医師には郭嘉四郎、軍人では中川審六郎、栗原一郎右衛門らが出た。

(25) 山中芳和「近世における国学普及の一形態」(岡山大学教育学部研究集録)一九八九・三は、近世の社中について「知識を中核とした一種の学問共同体」で、「知識を生み出し、交流させることを社中組織化の紐帯としたことにより、身分階層や職業の違いが乗りこえられた」と指摘している。

(26) 「報告」『わかのうら浪』第二集、一八九〇・一〇

(27) 寺西貞弘「本居宣長と和歌山の人々」(『本居宣長と和歌山の人々』和歌山国学人物誌)二〇〇二、和歌山市立博物館)

(28) 注(6)に同じ。

(29) 「報告」『わかのうら浪』四・五集、一九九〇・一二

(30) 旧藩主家に仕えた人々については、注(19)『明治の和歌山藩士族』を参照。

(31) 藩主家側が協会に関わる利点としては、例えば会に集った和歌山在の有力者や旧藩士たちとの関係性強化が一番考えられる。

(32) 宮間純一「御歌所の官制と職掌」(『宮中の和歌』明治天皇の時代)二〇一四、明治神宮)によると、御歌所員の役割は天皇、皇后の和歌の「拝見」や歌会に必要な文物の調達、また和歌史に関する調査研究などである。

- (33) 「官報」一八四八号(一八八九・八・二六、内閣官報局)、和歌山県編集・発行『和歌山県災害史』(一九六三)
- (34) 「報告」『わかのうら浪』第八集、一八九一・二
- (35) 豊穎については鈴木淳「本居豊穎伝」(国学院大学日本文化研究所創立百周年記念論文集編集委員会編『維新前後に於ける國學の諸問題』(一九八三、國學院大學日本文化研究所)がある。
- (36) 大八洲学会については、木野主計「解題」『明治期国学研究雑誌集成 解題・総目次』(一九九六、雄松堂)参照。
- (37) 開会時に定められた会則に「本居豊穎君の異見」が寄せられたことなどが「報告」『わかのうら浪』第一集、書誌前掲)に記載されている。
- (38) 国学の知識を広めるために雑誌を刊行することは大八洲学会の先蹤がある。「大八洲学会設立之趣意」(大八洲学会雑誌)一八八六・七)には、「この学を四方に普及せんと欲す。其方法の如き、通信を以てこの学に就て、本邦古今の制度沿革を亮知するを目的とす」とある。「通信」の語には当時整いつつあった郵便網による雑誌の授受が想定されている。
- (39) 例えば紀俊尚は「分けまし、神のひかりの影そひていやしげりゆく言のはの道」、近藤幸止は「万代の後もさかえむ千早ふるかみのつたへし敷しまのみち」と詠んだ。『わかのうら浪』第一集、書誌前掲)
- (40) 注(33)『和歌山県災害史』参照。
- (41) 参加した田納美都具は諸平の歌へ「むらの洲先の松にかけ分て内外の海の月をみるかな」を想起して現在の和歌浦との地形の違いを考証している。
- (42) 本居建正「九月十三夜和歌の浦に月見に物したることば」が『わかのうら浪』一五集(一八九一・一二)に掲載されている。
- (43) 和歌浦をめぐる記された諸作品については藤本清二郎・村瀬憲夫編『和歌の浦 歴史と文学』(一九九三、和泉書院)に詳しい。
- (44) 加納諸平が編集に関わり、紀尚長(俊尚の父)が序文を寄せた『紀伊名所図会』には和歌浦をめぐる詠まれた無数の詩歌が掲載されている。それら先行する諸作品は一行の念頭に常にあったものと思われる。

- (45) 復興期の成果には、加納諸平の没後三〇周年を記念して前田や紀らが師匠の歌文をまとめた『曾丹集摘草』(一八八七、野田大二郎)、前田編『和歌浦集初編上巻』(一八九三、野田大二郎)などもある。一八九四年には諸平編『類題和歌鯁玉集』(交盛館)も再刊された。
- (46) 門人組織から結社への移行については、佐佐木幸綱「詩歌の変革」(『岩波講座日本文学史』一巻 変革期の文学Ⅲ)一九九六、岩波書店)参照。
- (47) 例えば、「新詩社清規」(『明星』一九〇〇・九)に「新詩社には社友の交情ありて師弟の関係なし」、「われらは互に自我の詩を發揮せんとす。われらの詩は古人の詩を模倣するにあらず」とある。